

仁王 令和

tanazi1000

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2025年、電子の檻から多量のVRMMOプレイヤーが開放された喜ばしい年。しかし自身がタンスの角に小指をぶつけたことより大事な事が存在しないように、興味のない者にとっては目先の問題のほうが深刻だった。

増える凶悪犯罪、新たな犯罪の温床VR空間……

そして開かれた扉を閉めある者は天下泰平を成し、歴史の裏で活躍した偉人の一族の子孫が再び立ち上がる。

※不定期更新です

目次

ガサ入れ	1
強襲中	7
九十九ノ武器	14
撤退戦	18

ガサ入れ

マル暴倉庫ガサ入れ作戦

2025.01.20 02:00

東京都某所

東京武偵高等学校強襲科2年及び1年混成部隊

上下二連散弾銃に備わっているロックレバーを操作して機関部を露出、名前の通り上下に2つ空いた穴へショットシェルを2つ嵌め込む。

銃本体自体は折れたままにしておいて、ハンドガードを握りこむと銃身を肩に立て掛けて得物を抱える。

目の前のMP5を持った先輩や愛銃のベレッタm93rをこれでもかと穴が開くほど見つめている同学年の生徒、他にもPDWやSMGで武装した少年少女達が防弾仕様の人員輸送車に乗り込み揺られている。

彼らは共通してヘルメットを被り、防弾プレート入りのタクティカルベストに防弾繊維性のトラウザー(ズボン)、そして足元はブーツで身を固め銃器を所持していた。

危険度の高い作戦に挑むとあってか、車内の空気は緊張からかかなり張り詰めていた。

その空気に耐えられず、幾度目かになるかわからない重化投げナイフとステイムの位置の確認作業をしていると、なあなあと言う声と共に隣から脇腹を突かれた。

無視しても良かったが、張り詰めた空気から逃れたい気持ちが大きく出て会話に乗ることにした。

「どうしたの、柳井」

「当たり前のこと聞くが緊張してるか？三浦」

顔を動かして脇腹を突いてきた柳井という苗字の男子に顔を向ける、やはりというべきか緊張からか顔が強張っている。

「まあカチこむ時は何時もこんな感じだし、むしろ緊張しない方が少ないかな」

そんな返事をする。柳井が少し驚いた表情を見せた。

「お前でもカチコミの際は緊張するんだな、意外だったわ」

「意外って……ええ……」

一体自分は普段どのように見られているのか気になり、それを口に出そうとしたときだった。

車体が減速し始め、エンジンの駆動音が小さくなる。現着だ。

「さーて一年共お喋りは終わりだ、ほら出た出た」

車体の中程に居たMP5先輩が立ち上がると観音開きで車体後部のドアが開き、それを合図に靴音を鳴らしながら順番に搭乗者が降りていく。

車体から降りてまずはじめに迎えてくれたのは潮の独特な匂いと湿った風、次にあちこちで光るライトの投射光が目についた。

灯台の光やあちこちで光を放っている懐中電灯や目標の建物自体が光っていたため、蒲鋒形の倉庫は見えた。が……

「おい、事前情報より多いぞ……」

MP5先輩が苦虫でも噛み潰したように顔を歪ませた。

「こりゃ情報科がやらかしましたね、それか漏れたか……どちらにせよお札がある以上引くという選択肢はほとんど内に等しいですがどうします?」

「……よし、作戦を少し変更する」

少し思考を巡らせてからMP5先輩が口を開いた。

元々多少の妨害は想定しており、そのため強襲科の好成績な1年と中堅2年で編成された隊でやってきていたため交戦はさほど問題無いむしろそれが主作戦でもある。

問題は相手の数が多すぎる点である。いくら鍛えられた武装探偵であっても装備は規制の関係上アサルトライフルを持つことが難しいので火力に限りがある、しかも相手は事前情報からするに違法輸入したカラシニコフ系列の自動小銃を装備しており非常に厄介だ、おまけに学生のため練度はそこまで高くない。正面切つての撃ち合いとなるとジリ貧になるのが目に見えていた。

だが正面からの話であって、違う方法ではまた別の結果になる。正

規の軍人や特殊部隊とは少し違う戦い方を取れるのが武偵の長所の一つと言われている。

「俺と三浦の隊は正面で撃ち合い、側面から残りの二隊が掃射をかける。交戦中に諜報科がガサ入れてエンドだ配置は……」

テキパキと全員が頭の中に叩き込んだ見取り図を元に配置を指示していくMP5先輩。だがなにか引つかかるのか時折言葉に詰まったり、少しの間黙って何かを考える素振りを取っていた。

「隊長、どうしました？」

区切りの良いところで衛生科の生徒が隊長に話しかけた。

「どうとは？」

「いや、さっきからなにか何かが引つかかっているような素振りをするものですね……」

それを聞いたMP5先輩は顔に出てたか言って少し困った様な表情を見せたあと、すぐに真面目な顔つきで話し始めた。

「最悪の一手前を想定してたんだが。この異様な数の警備、もし情報が出ていたとしたら内部潜入の諜報科が来ることが既にバレているかもしれない」

そのセリフでその場にいる全員が強張った、本当だとすればガサ入れの成功率がかなり下がってしまう。

武装探偵ではあるので銃撃戦は問題ないとはいえ、諜報科は強襲科と比べると戦闘技術はそこまで高いものではない。むしろ戦闘を避け、潜入し破壊工作や情報収集を担当するのが諜報科だ。

一応護衛の強襲科が数名付いてはいるものの、本格的な戦闘となるとかなり不利なのは明白だった。

『こちらガサ入れ班から陽動班。内部の警備数が想定よりも多い、そちらから数名こちらへ回せないか？どうぞ』

「やはりか……よし。三浦、隊の指揮権を明石に譲渡して坂上と一緒に倉庫内潜入の諜報科の護衛に回れ、今回の山場おそらく情報が漏れる」

ガサ入れ版からの通信が入った。どうやら内部も想定以上の人員が動員されているようだ。

「ちよ、おい木村！」

「坂上、憲章5条および7条だ。外側で想定外が発生している以上内側も何かしらの予防策が取られてる可能性が高い。バックアッププランのB-12、非常階段から2階に侵入して内部にてガサ入れ部隊の援護と護衛だ」

「……くっそ、分かったよ。おい三浦！行くぞ、折ってるのにもとに戻しとけ」

「了解です、坂上先輩」

安全策の解除指示が出たので中折れ状態のCITORTI725を元に戻すと、銃口を下げる。

「こちら陽動班、想定していたより外の敵も数が多い。が、2名援護に行かせる。2年坂上と1年三浦だ、それ以上は送れないどうぞ」

「こちらガサ入れ班、突入するかどうか迷っていた援護感謝する。通信終了」

ブツツと通信が切られ、人員の配置及び突入準備と交戦準備が開始。

人目を盗んで、暗がりを移動する坂上と三浦の二人。ラペリングを使用して管理及び非常扉へと配置につく。

ズリズリとザイルロープを登りきり、扉の前で坂上が到着すると同時に膝立ちになるとツールキットからキーピックを取り出した。

後から登って追いついた三浦がザイルロープを回収後、坂上の背後をカバーするように片膝立ちの姿勢で725を構え辺りを警戒し始めた。

『こちら坂上、配置についたどうぞ』

キーピックで二階非常扉の鍵穴を弄りながら坂上が木村、MP5を持った2年の先輩、陽動班の班長に無線で連絡を入れた。

『陽動班了解、ガサ入れ班準備は？ どうぞ』

『ガサ入れ班、突入前に内部の状況を知っておきたい坂上頼めるか？ どうぞ』

『坂上了解、今より入る 通信終了』

カチャリと鍵が解錠される。ドアノブをゆっくりと回し、UZI

を構えた坂上が扉の開く音がしないように細心の注意を払いながら内部を覗き見てクリアリングを始める。

「クリア、二階に敵影なし入るぞ。ポイントマンは俺だ」

30秒ほどで索敵を終えて敵がいないことを確信した坂上が先頭に立ち、内部に侵入し始める。

「了解」

ほんの少し開けた扉の隙間から倉庫二階に侵入、当然扉の開閉音が響き渡らないようにしんがりの三浦がゆっくりとドアをしめておいた。

外に光が漏れていた時点で分かってはいたが内部は電灯によって明るく、敵影が肉眼で視認可能な状態だった。

「なんだこの数……しかも全員カラシ持ちかよ」

「最悪ですね、これ……ガサ入れ班が入ってきそうな場所は全部見張られているし」

一階のありとあらゆる入口の前で見張りが立っており、侵入者を排除しようとする意思が見て取れ、しかも日本国内では武偵であっても認可の降りにくいアサルトライフルの一種カラシニコフ小銃を全警備員が所持していた。

『坂上よりガサ入れ班へ、ありとあらゆる入り口は全部見張りが立っている どうぞ』

『ガサ入れ班、了解。陽動班、始めてくれ。バックアッププランB—12で行く。作戦開始だ 通信終了』

通信直後、倉庫の外側で発砲音が鳴り響き、続いて小銃の連射音が響き渡る。

「お前らあつ！ 学生さんのご登場だ、全員心してかかれよお？」

「オイっす！」

活きのいい掛け声が倉庫中に響き渡った。

「おうおう、そこまでバレてるのか……あとで情報科にきつく言つとかないと駄目だなこりゃ」

「で、先輩これからどうします？」

と三浦が聞くと……

「三浦、お前上下のやつスラグだったよな？」

「はい」

少し坂上は考えてから、自身の腰に吊り下げたワイヤーの先についた鉤爪を自身の居るキャットウォークの手すりに引っ掛けた。

「なら上で援護してくれ、下でガサ入れ班の強襲科のやつと一緒に暴れてくる」

「了解、ご武運を」

「そつちもな、一応相手カラシだから気をつけろ」

そう言い残して坂上は下に降りていった。

強襲中

「……!? なにか動いたっ!」

目のいいやつが居たのだろう、人員出入り用のドアが少しだけ動いた瞬間を見逃さなかった。

だがそれが命取りになるとは知らずに……

複数の少し開いた扉からまず一つカラリンと音を立てて何か投げ込まれた。その音を聞いた瞬間、三浦は片目を閉じた。

一瞬後、投げ込まれた何かは爆音と閃光を放ち爆発を起こし、近くにいた人間の視覚と聴覚を奪った。フラッシュバンだ。

「め、目があー!」

「あーくっそー!」

扉付近に居た警備を行っていた人物達は目や耳を押さえて悶苦しみ始めた。

「一斉に、突撃!」

その機を逃さず、バゴオンと音がなって複数の扉が蹴破られ、ボディーアーマーやヘルメットで身を固めた学生武偵の強襲科が突入を開始し始めた。

「スタンを投げる!」

ポイントマン達がスタングレネードをフラッシュユの被害が軽かった中央へぶん投げつつ、侵入口付近に居た戦闘員手足を撃ち、戦闘不能にしてゆきカバー箇所を確保していく。

ドンパチしている間に、諜報科が地下や地上の証拠物品を摘発、回収して離脱していくのが今回の作戦である。

「リロードする、弾が足りない!」

「学生がなんぼのもんじゃないやあ! お前らやってしまえ!」

ガサ入れ班所属の強襲科とカラシ持ちが撃ち合いをしてる最中、地上に降りた坂上はと言うと……

「シッフッフッ!」

足技とUZIの連射による近接戦闘術で敵をぶちのめしていた。

武探が使う近接戦闘術アルIIカタの一種、フランス系の技ラ・カン

を用いて戦っている。

とはいえ練度が甘いのか度々背後を取られそうになっているので……

「正しい見出し 正しい引きつけ……」

銃本体に載せられたチューブタイプの3倍率ドットサイトの照準を合わせて引き金を引く。ドウンと言う音と共にリコイルの衝撃が肩に伝わる。

坂上を狙っていた小銃持ちのタンクトップ野郎の利き腕、前腕にスラグが食い込む。

「正しい頬付け コトリと落ちるように」

再び照準を合わせて引き金を引いてタンクトップ野郎の後ろにいた小柄な男の利き腕にスラグをのめり込ませる。

「リロード！」

銃の根本にあるレバーを操作して折るとイジエクターが作動してからのシヨットシエルが吐き出された。

シエルホルダーからスラグ弾を2発取り出し、中腰の姿勢でキャットウォークにつけられた鉄板に身を隠しつつ場所を移し、シエルを薬室に入れ込んで右手を振り、折状態から撃てる状態に戻した。

「す、スナイパーだ！」

「うっ……撃たれた……」

「くっ、くそうなんだっというんだ」

次々と倒れるカラシ持ちの団員達、そしてその指導者と思われるスーツ姿の男へ坂上が歩み寄り……

「リーダーはお前かあ！」

地面を蹴って回し蹴りを男の首に叩き込みにかかる坂上。

「ヒイイ！先生お助けをー！」

男の首へ渾身の一撃が刺さろうとしたその時、坂上の脚が明後日の方向へ弾かれそして坂上が吹き飛ばされた。

粉袋が破けたのだろうか、あたり一面に白煙が立ち込めた

「たつく、今の極道は骨無しかよ……まあ、学生とはいえ武偵を侮るなって教訓は十分理解出来ただろうが」

男の声、そして彼はプツと何かを吐き出し、地面にそれが転がった。吸い殻だ。

「なるほどな。一人がガンカタでインファイト、そしてもう一人が狙撃で援護か。まさかスラグ撃つてくるとは思わなかったが……」

ドオウンドウウン重い発砲音とともに4発の銃弾が白煙から飛び出し、三浦が隠れていた鉄板を固定するネジを見事撃ち抜いた。

ガコンと言う音と共に落ちる鉄板。白煙が晴れ、男が銃を三浦がいるであろう二階のキャットウォークに向ける。が……そこには誰もいなかった。

「見当違いか？」

眉根を顰めた男、肌は浅黒いが他は一見すると高身長な一般男性に見えるがその道のものから見れば身体を鍛え上げていることは分かる。茶色のロングコートとガンマンが被るようなテロガンハットをかぶっていて素性が分からないが間違いない。

「武偵崩れか……」

鉄板の落下と同時に一階に降りた三浦が顔を歪ませる。

武装探偵は法の下犯罪と戦うが、稀に裏社会へ溶け込んで犯罪に手を染める者もいる。普通は小悪党止まりだが中にはこのように強大な戦闘力を持ちつつ裏社会を渡り歩く厄介な者もいる。

現に今日の前にいるは男子高校生の放った飛び回し蹴りといえどそれを防ぎ、なおかつ本人を飛ばした者だ。相当な人物と言えよう。

とはいえ三浦を見失っている今が好機なのは間違いない、わざとと遠回りして鉄板の墜落現場から離れると木箱の角に銃を固定して照準を合わせる。

「目標は奴の右腕」

しっかりと狙いを定めて引き金を引いた。

ダウンと発砲音と同時に銃口から発煙とマズルフラッシュ、そしてスラグが飛び出し武偵崩れの腕へめがけて飛翔していく……が。

ドウオン、カアン、キュウンとまたもや武偵崩れの持つ拳銃から重い発砲音が鳴り響きそして金属同士がぶつかり合う音……

「チツ、衝か」

源氏の一族に伝わる矢返しの法、飛び道具の矢弾を撃って被弾を避ける特殊な戦術。技名は違えど術理が同じような技は世界中にあり、現代の武偵も使うことがある。

もつとこれが使えるところは相当な反射神経と頭の回転、そして銃撃戦のセンスがあるということでもあり、手強い相手でもある。既に撃つて場所がバレており、矢弾撃ちの技術持ちとなれば725は要らないと判断して輸入品の木箱に得物を立て掛け、肩を回しながら隠れていた物陰から出ていき、敵へと歩み寄る。

「ほう、やれるのか？ 楽しませてくれれば幸いなんだがな」

褐肌の男は逃げも隠れもせず出てきた三浦を見据えながら銃口を向ける。

獲物はデザートイーグル50AE、自動拳銃界では最強クラスの弾薬を使用するマグナム拳銃だ。

「それはやってからのお楽しみだッ！」

左太腿に巻きつけた投げナイフを左手で抜き、そのまま腕を振って勢いをつけて男の足首へと投擲する。

無論、先程のスラグ弾と同じように銃弾で弾き飛ばされる。元々当たるとは思っていない捨て駒なので問題はない。

そして右太腿の巻きつけたレッグホルスターからカスタムにカスタムを施しトリコロールの塗装を施され、45winマグナム弾を発射できるようにしたクロンガバメントをファストドロワー、男の元へ走りつつ銃口下部に着けたレーザーエイミングモジュールを頼りに彼の脚部めがけて3回引き金を引く。右手に重いリコイルショック、薫る硝煙。

放った3発の内2発は外れ、1発は再び50AE弾で撃ち弾かれる。それと同時に男の持ったDEのスライドがホルドオープン状態になる。弾切れである。

目視でそれを確認し、歩法を変える。

閃歩と呼ばれる、一瞬で中距離を詰める特殊な足捌きで一気に肉薄すると男、予想できなかったのか咄嗟に行動を起こせず硬直してしまった。

その隙に左拳を握りこむと、アッパーを男の顎めがけて叩き込んだ。

膂力の問題で吹き飛ばすことはできなかったが、顎にクリーンヒットしたため軽い脳震盪を起こしたのか立ちくらみを起こす武偵崩れ。

winマグナムを2発胸部に放ち追撃、ロングコートは防弾素材で出来ていて、弾丸自体は食い込んでひしゃげた金属片になって地面にチリンと音を立てて落ちるが、撃たれた本人は肺腑に直接ダメージが入ったのか噎せる。

間髪入れず回し蹴りを側頭部に一発、そして続け様に喉に蹴りを入れ、そこから清流の如く滑らかな動作で蹴りを胸部に叩き込んでから背後を向き、宙返り。丹田を軸に空中で一回転すると両足の踵で蹴り落としを頭頂部に決めた。

通称五月雨蹴り。三浦の収めた武術、安針流戦闘術手甲ノ型では基本の武技であり崩しの性能に長け、なおかつ与えられるダメージも高くかなりお世話になっている。

上半身、特に首から上の急所に打撃を叩き込まれかなり朦朧とした武偵崩れに最後の一撃を決めるべく三浦は五月雨蹴りの隙を消しつつ次の動作に備え構え直す。

地味ではあるが安針流の根幹とも言っているいい武技、残心。

攻撃行動終了時に息を整えつつも次なる一手を放てるよう構え直すこの技は安針流特有の攻撃の連綿を成すにはなくてはならない技術であり、修了者は確実に会得している程には基礎中の基礎である。

「先生ッ！」

「チクシヨォー！撃てえ！」

近くにいた組員達がボコボコに蹴られた武偵崩れの姿を見て、カラシニコフの銃口を三浦に向けた。

「ちよっ!? AR数名は普通にキツイっての！」

浦風と呼ばれる回避法（といっても側転やバク転を組み合わせただけの移動法である）でちよこまかと射線を切りつつ移動し、途中で中折散弾銃を回収して木箱の影に潜り込み射線を切る。

「どうすつかなあ……これ……てか粉のせいで咽そう」

拳銃の弾倉を交換して散弾銃の空シエルも新品のスラグシエルに変えた後、舞い上がった粉の煙幕の中でこの後の行動をどうすべきか考えていると……

「み、三浦か？」

聞き慣れた声とはいえ戦場真つ只中な場所のため反射的に声の間こえた方向へ散弾銃を構える三浦。

「坂上先輩？無事ですか!？」

「ああ、そうだ。すまん痛み止めか何かないか？ないと思うが……」

初め眉間に皺を寄せていた三浦だったが声の主がバディだと判明すると散弾銃の銃口をおろして坂上の方へ移動する。

全身粉まみれで真つ白になった坂上、ヘルメットを被っていないことに気がつく

「メット割れました？一応自分以外の人に投与すると効き目薄いんですけど治癒促進剤のステイムあるんで打ちますね」

「よくわかったな、箱にぶつかったときにヒビ入って使いもんにならなかった、すまん。右脚あいつに殴られて肉離れか何か起こした感じなんだ」

「ちよと見ますね……あつこれ完全に肉離れですわ……ステイム一本打ちます」

「足引つ張って済まない、先輩のメンツが丸つぶれだあ」
「まだ生きてるだけ儲けものですよ」

先輩のズボンの裾をめくりあげ、ステイムのキャップを口で噛んで外すと赤く腫れたふくらはぎに無痛注射針を刺して、薬液を注射した。

「これ回復力は超能力者の素質がある人以外では効き目薄いんで、一応痛み止めは一般の入ってるんで大丈夫ですけど」

「無いよりはマシだ、とりあえず俺はお荷物になりそうというか今からなるんだが、ここから出て衛生科世話になる、すまないが運んでくれるか？」

「お安い御用ですつ！おつもつ」

強襲用の装備はそれ単体で20kgはある、そして武偵の強襲科は大抵が鍛えて筋肉量が多い、筋肉は脂肪より重い。結果素の体重が大きいいため装備合わせるとかなりの重さになる。

「大丈夫か？」

「大丈夫です、その代わりこの任務終わったら何か美味しい店で飯でもおごってくださいなッ」

左肩に先輩を担ぎ、右手でガバメントを保持して中腰姿勢で移動を開始した。

九十九ノ武器

「リロードする！」

「3時方向から撃たれまくってる！」

「武偵がなんぼのもんじやい！」

「こつちたま足りねえ！じゃんじゃん持ってこい」

怒号と発砲音、硝煙が漂う戦場の中を、重い装備をつけた先輩を担ぎながら三浦は息を潜めつつ武偵側の領域にある侵入口へ移動する。

中腰の態勢に加えて重い者を運搬しているため三浦の息は乱れ、額には玉の汗が浮かんでいた。

『全強襲チームに告ぐ、目標の奪取に成功。直ちに撤退を開始せよ！
繰り返す。全強襲チームに告ぐ……』

幸運にも作戦は成功し、撤退フェーズへ移行したが最悪な事が発生した。もう一步のところで突破しようものならば確実に戦闘になりそうな場所に戦闘員が何名か武偵と撃ち合っていた、どうも武偵側の最前線に来てしまったようだ。

「逆に言えばここさえ超えれば後はなんとかなるんだがな……」

「流石に……先輩担ぎながら突っ切るのはきついです」

どちらも射程がギリギリなのか中々に相手に着弾して戦闘継続不能まで持っていけないらしく膠着状態に陥っていた。

（どうする？一か八か、ソハヤで……）

拳銃をしまい、腰にポーチ類と一緒に装着した古い匕首に手を伸ばし、抜こうとしたその時

「Ok溜まった！飛ばしていくぜ！」

青い曳光弾のPDWをぶっ放していたとある男子武偵生の一人が大振りなフォールディングダガーを二本骨盤付近の左右のポーチ群から抜き、白兵戦に乗り出したのだ！

「おっしやあいつてこい鎮！」

（鎮！マジ!?やったぜ）

銃撃戦の最中白兵をしだすととなると普通なら頭がイカれたとしか見えないが彼ならば問題ない、なぜなら……

「来い！【天眼孔雀】オン マユラキランテイ ソワカ！」

真言を鎮が唱えると、二本のダガーの刃だけが消滅し、柄だけになった。そして……

【DS変体】

両方のダガーにある柄頭を合わせた。すると、青い液体のような気体のような特殊な物質が発生し、長柄が生成されその先端にフォルディングダガー。

刃は姿を消し、長柄を構成している物質に置き換わり一回り大きく刃を形成した。

両剣と呼ばれる特殊武器の形をしたポールウエポンがそこにはあった。

九十九武器、精霊や神仏の力を武器に宿し振るう強大な降霊術の一種。その刃は悪鬼羅刹を切り裂き、常世を払う力があると言われている。

霊力を扱うことができ、なおかつ前述の守護がある者が振るえ得る一撃は、常識を超える。

多数のカラシの発砲音、宙に舞う空葉莢、そして鎮へと飛来する弾丸。

しかし、それらはすべて回転させた九十九両剣によって反射され、射撃主へと返される。

ぐるぐると両剣を回転させながら暴力団員への元へ走り出す鎮。

次々と反射された弾丸で負傷していく団員達、硝煙弾雨の中、飛来物を跳ね返しながら迫りくる謎の武器を持った武偵。

この状況で彼に畏怖せず立ち向かえるほど団員達の精神は強くはなかった。

「ば、バケモンだあ！」

「お、おいどこへ行く!?!」

一人が逃げだせば後は早かった。蜘蛛の子を散らすように後退を始めるならず者達、それでもなおその場にとどまり応戦する者もいたが虚しくも鎮の持つ九十九武器によって意識を刈り取られた。

衛が団員達をボコボコに叩いている間、その隙に最後の力を振り

絞って負傷した先輩を担いだ三浦が前線のホットスポットを駆け抜けていく。

何とか金属の小型コンテナの影に滑り込み、肩を上下させ大きく空気を吸い込む三浦。

すぐに駆け込んだできた闖入者が何かを肩に担いでいた事に気がついた強襲チーム配属の衛生科の知り合いがやって来た。

「負傷者だね、すぐに治療する。何か応急処置は？」

「ハーミットステイム」を投与した、肉離れおこしてる」

「了解！ この雷久保に任せな、とりあえず冷やしてテーピングから移動車両に運び込む。秀麗、あんたどこか怪我は？」

「私は大丈夫、今ドンパチやってる目的は？」

秀麗が聞き返すと、雷久保は瞬間冷却パックにパンチを噛ましてからそれを布で覆い、坂上の左脚に巻きつけつつも答えてくれた。

「今は撤退戦で逃げ遅れを待ってる、とりあえず地下に1個分隊で彼らはなんとか出れるらしいけども苦戦してるらしいよ。手伝ってあげれるなら行ったほうがいいかも」

「分かった、行ってくる、坂上先輩をよろしく」

「任せな！」

坂上先輩を預け、そのまま地下倉庫への入り口へ向かう秀麗。その途中

「おい、三浦！ お前の弟のだけが持ってけ、俺じゃ使えん」

鎮とバディを組んでいた男子が蒼と黒のツートーンカラーでスタイリッシュな外装に仕上げたPDWを渡してきた、見た目はM4、正式名称AR15のショートバレルカスタムに見えるが、弾薬が完全に霊力や、魔力といったエネルギーを変換してぶっ放す超兵器であり、銃器とは認められていない特殊な武装だ。

最も弾源が霊的エネルギーなので使える人物に限りがあるのが欠点だが、少なくとも霊能力の素質がある秀麗は問題なく使える。

銃火器を受け取って一度マガジン抜き、左手で握りこんで霊力を流し込む。マガジンの側面で光っているエネルギーの残量を示す青く輝くゲージが半分程度だったのがそれでマックスにまで戻り、今度は

紅く輝き始めた。

マガジンを刺し直して、コツキンググハンドルを操作。

「ありがとう、じゃあ行ってくる」

「致命的な怪我しないように気をつけろよ!?!」

撤退戦

制圧済みの倉庫地下下行り階段を早足で駆けていく秀丽、そこそ長いすでに段数半ばの場所ですらでグレネード系の炸裂音とライフル弾が連射される発砲音が響き渡っていた。

「フラッシュの準備しとくかあ……」

秀丽はタクティカルベストに付けたピン部分を留具にかけた閃光手榴弾を取ると、安全レバーを握り込んで投擲準備を開始する。

階段を降り、しけたコンクリ壁だけしかなかった視界が開け、多量の物資が規則正しくそして多量に置かれた光景と共に目に入ってきたのはジャージヤスカジャンを着込んだ等いわゆるチンピラ風の人物達。

事前に聞いていた地下に残された1部隊と撃ち合ってるのか秀丽には気づいておらず背中を見せて無防備な姿でロシアの軍用マシンガンPKシリーズを乱射していた。

これでは迂闊に真正面から撃ち合うことは不可能である、排除して進もうにも危険で出れないのも納得が行く。

だがそれこここまでである。

「フラッシュ投擲！」

警告と共に秀丽は閃光手榴弾を投擲、それと同時に階段の手摺を飛び越えて手頃な木箱の物陰に隠れ閃光から目を保護する。

バグインと轟音が鳴り響き、チンピラ達が目を焼かれた苦しみから喚き始める。

「今だ！撃て！」

取り残された部隊の隊長である2年生が部隊に指令を出し、視界を奪われたチンピラを制圧すべく射撃を開始し始める。

秀丽も負けじと障害物から身を乗り出してvoitkの引き金を引き、弾を送り出した。特にマシンガン持ちを優先して。

シュピピピピとおもちやのSEような発砲音が鳴り響くが、その正体は霊力を固形化して発射するエネルギーガンである。

しかもそういったオカルト系のエネルギーは氣力を削りやすく肉

体への損傷を最低限に抑えつつ気絶に持っていきやすい性質があり無力化に向いているのである。

マシンガン持ち2名をのしたあと、定番AKやどこから密輸入したのかSHAK—12持ち等計4名を気絶に持っていったところでレシーバーが停止、放熱を開始し始めた。

どうも連続して射撃したのがまずかったのかオーバーヒートしたらしい。

こうなれば使い物にならないのは一目瞭然。近場のAK持ちに銃ごとぶん投げてまず怯ませると同時にハンドガンホルスターからファストドロ―しつつ片手で発砲、2発目からは両手で銃をきちんと保持して2発の弾丸を利き腕と利き足であろう右側の二肢を撃ち抜いて行動不能へ追い込む。

「うーあああああああ」

背後から雄叫びが聞こえ、秀麗が振り向こうとした瞬間強烈な衝撃が身体にかかり吹き飛ばされ頭を打って地面に横たわる。

不幸中の幸いで強化プラスチック製のメットを被っていたため出血は無いが最悪な事に軽い脳震盪を起こしたのか軽い吐き気と目眩が発生し、身体をすぐさま起こすことが難しい状態だった。

物が二重に見える視界、その中で一際目立つかなり大きいガタイをした男が秀麗の元へ飛びかかってくるのが見えた。

飛び起きようにも身体は言うことを聴かず、男に馬乗される秀麗。そして男は秀麗の顔面にまず一発重い拳めり込みました。

男の拳が顔面にぶつかるのとは別にパキッゴリッという音が鼻筋から発生したのを秀麗は聞いた。鼻の骨が折れたと彼女は確信。

男、二撃目からは頬部位を連続して殴り始め、ゴスツ、ゴスツと音が鳴るたびに顔全体に衝撃が走り脳が揺れ意識が朦朧とする。

そんな中、秀麗は腰に手を伸ばす。

正確にはソハヤマルに――

ソハヤマルの柄を掴むとそのまま引き抜き男の脇腹、それも肋骨部に柄頭をめり込ませた。

「フンツグッ!？」

不意打ち。しかも胸部、肺付近にだ。

打撃を受けた男はうめき声を上げるとよろめく、その隙に秀麗はソハヤマルを自身の丹田へと突き刺した。

秀麗から霊力が溢れ、翠色の浄の炎が彼女の付近で荒ぶり始める。

秀麗を殴っていた男はその炎に焼かれ一瞬で気絶した。

突発的に発生した異常現象にヤクザ側も武偵も撃ち合うことを一時的に止め、一部の者は口を空けた間抜けヅラで、ある者は固唾を飲み秀麗の居るであろう焔の荒れ狂う場所を見つめる。

そして少して焔の渦が収まる。

その場には翠の靄を纏い、うつ伏せに倒れた先程まで秀麗をタコ殴りにしていた大男と――

「あークッソー！」

あぐら状態で悪態をついて鼻血を垂れ流している鼻の穴に指を突っ込みなにかしようとしている秀麗の姿があった。

彼女は指を使って鼻を上げ、悲鳴を上げた。

鼻の骨が折れたので応急処置で無理やり直したのだ。

「痛つったあ！クソッ覚えとけよ！もーゆるさんからなあ？」

そんなセリフと同時に彼女が立ち上がると、背後に翠色の半透明で鬼といしか言いようない容姿の何かがスウーと現れた。

「ヒイツ!？」

秀麗の気迫もだが、背後の鬼の霊とも言うべき存在が手にした獲物を見てヤクザ達が顔を青くした。

「歯あ食いしばれ、クソども」

その手に七支刀を持った鬼霊が上段に構えた秀麗を真似て八相の構え、バツティングフォームに似た構えで刀を構え始めた。